

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 10 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381300

研究課題名(和文)聴覚障害児が豊かな日本語に接することのできるろう学校の学校図書館づくり

研究課題名(英文)Creation of school library in schools for the Deaf for children with hearing impairment to be exposed to rich written Japanese

研究代表者

武居 渡 (Takei, Wataru)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：70322112

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、聴覚障害児が日本語により親しみ、多くの日本語と接する場として機能するろう学校の学校図書館のモデルを提案することを目的とした。まず、先進的な取り組みをしている外国のろう学校の学校図書館の現地調査を行った。また日本のろう学校に対して質問紙調査を行うことにより、ろう学校の図書館の課題を明らかにした。課題を解決するために、アクションリサーチの手法を用いて、3つのろう学校の学校図書館の改革を行った。その結果、蔵書数の確保、子どもの言語力と本の難易度のマッチング、本を理解したかどうかを確認できるクイズの作成などを行い、一定の成果を得た。

研究成果の概要(英文)：The current study aimed to propose a model of school library in schools for the deaf which works to provide children with a hearing deficit to get familiar and contact with various Japanese expressions. A field investigation was performed at first for school libraries in schools for the deaf in foreign countries which have been taking advanced approaches. In addition, problems of libraries in schools for the deaf in Japan have been revealed by conducting a questionnaire survey for them. Adopting an approach of action research to solve the problems, a reform has been conducted for school library of three schools for the deaf. Certain outcomes have been achieved as a result of securement of sufficient number of books to be held, matching of children's language skill with difficulty level of books, and preparation of quiz to confirm whether they understood the contents of books.

研究分野：聴覚障害心理学

キーワード：ろう学校 学校図書館 リテラシー

### 1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、我が国の多くのろう学校でコミュニケーション手段として手話が導入されるようになった。我妻(2004)の調査によると、わが国でも、平成14年には、ろう学校幼稚部教員の半数以上が手話を用いて教育をしていることが明らかになり、手話が積極的にろう教育の中で用いられるようになったということが出来る。獲得した手話の力を使って、日本語リテラシーの習得をねらった教材もこれまで多く開発されてきた。研究代表者である武居らは、小学校1年生から3年生までの国語教科書に載っている教材を手話翻訳したビデオ教材を作成し、ろう学校にそれらを配布し、使ってもらった。従来、日本語力の厳しい子どもに対して国語の授業を行うと、本文を最後まで読んで理解することができず、本文中の単語学習のような授業になりがちであった。このような授業は子どもの授業参加意欲を下げ、日本語嫌いを助長することになってしまう。この手話ビデオ教材によって、教科書本文の内容を手話を通して理解できるため、理解した内容がどう書かれているかという視点から日本語学習が可能になる。その結果、日本語力の厳しい聴覚障害児も意欲的に国語の授業に参加できるようになったというろう学校現場からの報告も多くある(勝村, 2001; 西村2001)。

しかし、手話が第一言語である聴覚障害児の日本語学習の初期においては、手話の力を活用した授業展開が考えられるが、日本語の基本知識を身に付けた後は、いかに多くの日本語を読み、書くかにかかっている。このとき、個々の子どもの興味に対応した日本語教材を提供できる場としてろう学校の学校図書館が考えられる。一般学校では、ハード面とソフト面の両方において様々な工夫を行うことによって、魅力ある学校図書館を作り、子どもの学習の促進を図っている。これが可能な理由として、各学校が比較的近い年齢集団で構成されているため、子どもの興味にあう本を集めやすいことがあげられる。また学校図書館に専任の司書教諭がいる学校は、本の貸借以外にも、クリティカルな思考を促す指導の場として学校図書館が一定の役割を担ったり、書籍をクリティカルに読んでいくためのプロットシートやプリントを用意したりするなど、学校図書館が積極的に子どもの学習にコミットし、教育効果を上げているという報告もある(桑田, 2010)。一方ろう学校では、幼稚部から高等部専攻科までの聴覚障害児が在籍しているため、すべての子どもの興味にあう本を豊富に備えることは難しい。また、多くのろう学校では、司書教諭も担任をもっているため、図書の本以上の業務を行うことができず、本来聴覚障害児にとって多くの日本語に出会い、知識を深める場であるはずの学校図書館が有効に活用されていないという現状がある。欧米のろう学校

では、学校図書館に所属する教員が複数名おり、その教員が子どもの言語力にあった本を紹介したり、本によって得た知識を批判的に考えるためのプリントを用意したりしている。また、幼児期に読む本には、同じ内容の手話翻訳ビデオを作成し、本を読むことに対する認知的負荷を下げるような工夫もしている。内外の先進的な学校図書館の取り組みを参考にし、国内のろう学校の学校図書館と協同して、聴覚障害児の日本語学習に貢献できるろう学校の学校図書館のモデルを示すことが重要であると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究では、聴覚障害児が日本語により親しみ、多くの日本語と接する場になるために、我が国のろう学校の学校図書館ができることを明らかにし、実際に複数のろう学校と協同しながら、学校図書館の改革を行う。最終的には、聴覚障害児を日本語嫌いにさせず、多くの本を読み、また読むことを通して日本語をはじめとする様々な知識が得られるようろう学校の学校図書館のモデルを提案することを目的とする。その目的を達成するために、本研究では4年間の中で以下の4つの研究課題に着手する。

(1)国内のろう学校の学校図書館の使用状況についての調査研究

(2)学校図書館の先進的な取り組みに関する実地調査

(3)アクションリサーチによるろう学校の学校図書館改革1(ハード面の工夫)

(4)アクションリサーチによるろう学校の学校図書館改革2(ソフト面の工夫と教材開発)

### 3. 研究の方法

(1)研究1 国内のろう学校の学校図書館の使用状況についての調査研究

平久江(2010)を参考に、全国のろう学校の学校図書館所蔵書籍数、利用状況、学校図書館運営方法、図書館司書数、司書教諭数、学校図書館の特色ある取り組みについて尋ねる質問紙を作成する。作成した質問紙を、全国のろう学校(分教室やサテライトを除く)に送付し、ろう学校の学校図書館の現状について明らかにする。その上で我が国のろう学校の学校図書館の現状を明らかにし、聴覚障害児の日本語学習に学校図書館が果たす役割と課題を整理する。

(2)研究2 学校図書館の先進的な取り組みに関する実地調査

先進的な取り組みをしている学校図書館(国内2か所、海外2か所)について実地調査を行う。アメリカのGallaudet University Kendall school for the Deafの学校図書館には、図書館専任の教員が複数名おり、図書館にあるすべての本の難易度が本の背表紙にあるマークによってわかるようになってお

り、子どもは自分の言語力にあった本を選んで借りることができる。また、幼児や児童向けの書籍には、その内容を手話翻訳した手話ビデオが作成されており、高学年の児童が読む本には、読みながらプロットシートに書き込むような教材が用意されている。この図書館を視察し、資料収集やインタビュー調査を行う。

### (3) 研究3 アクションリサーチによるろう学校の学校図書館改革1(ハード面の工夫)

応募者と関係が深く、手話が早期から導入されているAろう学校、B県立ろう学校、Cろう学校の3校と協同して、子どもが本を借りたくなるような図書館の本棚の配置、閲覧室の構成、ソファや机の配置など、3校の教員と議論し、実際に図書館の構成を変え、子どもの図書室来室状況や本の貸出数などから、配置構成の効果を検討し、評価を行う。実際に行動を起こしながら、評価を行って、行動を改善していくアクションリサーチ法を使いながら、現場教員と協同して図書館のハード面での改革を行っていく。

### (4) 研究4 アクションリサーチによるろう学校の学校図書館改革2(ソフト面の工夫と教材開発)

上記3校と協同して、本の難易度が分かるようなラベル表示の開発、幼児や低学年児童向けの本の手話DVD作成、本を読み進める際に使用するプリント教材の作成などを行う。これらの教材についても、3校のろう学校の教員と定期的に議論をし、実際に教材を作り、在籍する聴覚障害児に使用し、改善点を整理したうえで、再び議論をするアクションリサーチを行う。

## 4. 研究成果

### (1) 研究1 国内のろう学校の学校図書館の使用状況についての調査研究

全国105校のうち68校から回答があった。回収率は64.8%であった。以下、主な結果を記す。

①面積について：100㎡未満のろう学校が8割以上を占めた。通常小学校の学校図書館の最低面積が280㎡であることを考えると、ろう学校の図書館は狭いといえる。

設置形態：多くのろう学校は専用室を設けているが、視聴覚室やメディア室、会議室などと兼用している学校もあった。

蔵書数：最も少ない学校で620冊、多い学校で20705冊と学校間の差が大きかった。しかし、幼稚部から高等部までの子どもが使用することを考えると、この蔵書数では、子どもたちにあった本を提供できていない可能性がある。

主たる運営者：担当の校務分掌と回答した学校が44校(61%)、司書教諭が8校(11%)、学校図書館担当職員が8校(11%)、その他が12校(17%)であった。司書教諭や担当職員

がいない学校も29校(40%)あり、常駐して図書館の管理を行う人がおらず、子どもの図書館利用に時間的制約がかかっているという報告もあった。

年間図書購入数：学校間の差が大きく、最低が0冊、最高が325冊であった。しかし、購入する本を各学部で分けることになるため、通常学校の年間購入数と比較しても、ろう学校では新しい本やシリーズ本の継続的な購入に支障が出ると考えられる。

蔵書分類法：多くは日本十進分類法を用いて蔵書を配列していたが、分野ごとにシールを貼って分類したり、推奨する学部ごとに分類したりするなど、学校独自の分類法を用いて配列を行っているところもあった。様々な言語力の子どもたちが自分の言語力にあった本を選べるような配列方法が望まれる。

### (2) 研究2 学校図書館の先進的な取り組みに関する実地調査

手話を教育に積極的に取り入れ、英語とアメリカ手話のバイリンガル教育を行っているKendall Demonstration Elementary SchoolおよびMaryland School for the Deafの学校図書館を参観し、また関係者に対して面接調査を行った。この調査のうち、わが国のろう学校の学校図書館に応用できる事柄として以下の点が挙げられる。

- ・本の難易度を250語レベル、500語レベル、1000語レベルのように分類し、本の背表紙に難易度がわかるシールを貼っていた。これにより自分の言語力にあった本を選ぶことができる。

- ・授業に用いる本については、本の概要を理解しているかどうかをチェックするクイズが用意されていた。

- ・低学年用の図書には手話翻訳したビデオやDVDを用意しており、手話による読み聞かせも行っていた。

### (3) 研究3・4 アクションリサーチによるろう学校の学校図書館改革

ろう学校図書館が抱える問題として大きく、1)在籍児童生徒数の少なさと年齢の幅の広さから児童生徒のニーズに合った書籍を用意できないこと、2)児童生徒の言語力と読むべき本のマッチングがうまくいっていないこと、3)幼児向けの絵本の手話翻訳溶剤の必要性、4)本を読みたくなるような教育的仕掛けづくり、が挙げられた。

1)在籍児童生徒数の少なさと年齢の幅の広さから児童生徒のニーズに合った書籍を用意できないことについては、ろう学校を移動図書館のストップスポットにしてもらうこと、県立図書館からの機関貸出を利用することを提案した。2)児童生徒の言語力と読むべき本のマッチングがうまくいっていないことについては、本の難易度が一目でわかるようなシール等を貼るなどの提案を行った。しかし、本の難易度を評価する方法の提

案には課題が残った。3) 幼児向けの絵本の手話翻訳溶剤の必要性については、様々な団体が手話読み聞かせDVDや手話翻訳教材を作っているため、それらのデータを整理し、入手可能なものは入手した。4) 本を読みたくなくなるような教育的仕掛けづくりについては、課題図書に指定と内容理解ができているかどうかを確認するクイズを作ることを提案した。また先生や保護者が推薦する図書を定期的に紹介することなどを提案した。

これらの提案を、複数のろう学校で部分的に実践してもらった。成果を実証的に検証することには至らなかったがこれらの実践がろう学校の図書館の改善につながったことは確認できた。今後のかだいとしては、これらの実践を継続的に行うことのできる組織をどのように作っていくかということが挙げられた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

武居 渡 (2016) 聴覚障害児教育をめぐる環境の変化とろう学校の課題 (特集 特別支援学校における現状と教育要求). 障害者問題研究, 44(1), 26-31. 査読有.

江尻桂子・武居 渡・松澤明美 (2015) 心理・教育・看護の研究実践から考える障がいのある子どもの家族への支援: 家族を中心とした今後の支援を目指して. 茨城キリスト教大学紀要. 2, 社会・自然科学 (49), 285-299. 査読無.

武居 渡 (2014) ろう学校のテキスト. 手話・言語・コミュニケーション, 1, 32-57. 査読無.

〔学会発表〕(計5件)

TAKEI, Wataru "Assessing Japanese Sign Language vocabulary development of Deaf children". The 12th Asia pacific congress of deafness 2016. クライストチャーチ(ニュージーランド), 2016年7月9日.

武居 渡 「日本手話語彙理解検査の開発 - 語彙の写像性と難易度の点数化から - 」. 発達心理学会第 27 回大会. 北海道大学 (北海道・札幌市), 2016年4月29日.

武居 渡 「聴覚障害のある子どもを持つ保護者は仕事をやめなければならないのか - ろう学校幼稚部に対する保護者同伴形態の現状に関する質問紙調査より - 」. 日本特殊教育学会第 53 回大会. 東北大学 (宮城県・仙台市), 2015年9月21日.

武居 渡・中村佳央理 「聴覚障害児が豊かな日本語に接することのできるろう学校の

学校図書館づくり(1) - ろう学校図書館の現状と課題に関する質問紙調査から - 」. 日本特殊教育学会第 52 回大会. 高知大学 (高知県・高知市), 2014年9月21日.

武居 渡 「ろう児の手話語彙力を評価する(2) - 評価課題の作成と評価の観点から - 」. 日本特殊教育学会第 51 回大会. 明星大学 (東京都・日野市), 2013年8月31日.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

取得状況 (計0件)

〔その他〕

なし

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

武居 渡 (TAKEI Wataru)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号: 70322112